様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ２１１４５

研究課題名（和文）非漢字圏学習者の漢字語彙学習の成功に影響する要因の解明：効果的な学習支援のために

研究課題名（英文）Factors affecting the acquisition of Kanji and Kanji compound words among Japanese learners with non-kanji background: aiming for effective learning support

研究代表者
大和　祐子（Yamato, Yuko）

大阪大学・日本語日本文化教育センター・准教授

研究者番号：８０７０７４４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，非漢字圏日本語学習者が漢字語彙学習に成功する要因を明らかにすることを目指した。本研究では，（１）反応時間パラダイムを用いた実験による非漢字圏日本語学習者の漢字書字認知メカニズム，（２）非漢字圏日本語学習者の選択する漢字学習ストラテジー，（３）非漢字圏日本語学習者の日本語の語彙知識・漢字の書き取り能力・漢字の読み取り能力との因果関係，および漢字書字認知に対する語彙知識と学習期間の影響について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの研究では，日本語初級レベルの非漢字圏日本語学習者に対する漢字の書字認知メカニズムについての考察はあるものの，ある程度日本語学習が進んだ非漢字圏日本語学習者の漢字の書字認知の特徴やその特徴が漢字圏日本語学習者のものがどのように異なるかということについては明らかにされてこなかった。これらの点について，本研究では明らかにすることができた。加えて，本研究では，漢字の書字学習に成功した非漢字圏日本語学習者には日本語の語彙知識が同時に備わっていること，選択する漢字学習ストラテジーがそうではない学習者とは異なっていることについても明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate factors affecting the acquisition of kanji and kanji compound words in Japanese among Japanese learners with non-kanji background. This study examined the follows: (1) Mechanism of kanji and kanji compound words recognition by learners of Japanese with non-kanji background using experiments of reaction-time paradigm, (2) Kanji learning strategy by Japanese learners with non-kanji background, (3) A causal relation between Japanese lexical knowledge and kanji reading/writing by Japanese learners with non-kanji background, and besides, the effects of lexical knowledge and learning-length on kanji cognitive processing by Japanese Learners with non-kanji background.

研究分野：日本語教育学

キーワード：漢字（語彙）認知処理　非漢字圏日本語学習者　反応時間パラダイム　漢字学習ストラテジー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９(共通)

１．研究開始当初の背景

日本語学習者を対象とした漢字教育には,「高頻度語彙・必須漢字語彙の計量的調査研究」「情報処理モデルや認知科学的な実験などによる研究」「学習者の意識調査・学習ストラテジーの研究」の成果が生かされるべきである(加納 1999)が，現状ではそのような研究が少なく，また研究成果が漢字教育及び漢字教材開発などに十分に生かされているとは言いがたい(小林 2003)。

特に非漢字圏日本語学習者の場合，漢字学習を成功させることができるかは，日本語を習得する上で重要な点の１つである。一方，漢字を教える側からみると，漢字を授業時間内に十分に時間を取って教えることは難しく，ある程度，漢字の学習は学習者の自学自習に任せざるを得ないというのが現状である(加納 1997；横須賀 1999)。以上のような現状を踏まえると，学習者の漢字学習をどう支援するか，という視点で漢字教育を考えるべきであることが分かる。

非漢字圏学習者の漢字学習を支援するためには，まず，非漢字圏学習者の漢字認知がどのように行われているかを知る必要がある。また，漢字学習を効率的に行うために，有効な漢字学習ストラテジーを学習者に提示する必要がある。漢字を学習するためには様々なストラテジーがあるが，母語に漢字を持たない非漢字圏学習者にとっては，その学習方法が分からないということが少なくない。漢字学習に成功していると言える学習者がどのような漢字学習ストラテジーを用いているかを提示することができれば，漢字を勉強しているのに覚えられないと悩む学習者に対して，有意義なアドバイスができると考えた。

２．研究の目的

本研究では，非漢字圏日本語学習者のための漢字学習支援に貢献するために，３つの研究課題を挙げた。【課題１】非漢字圏学習者の漢字認知メカニズムの解明では，非漢字圏学習者の単漢字処理と漢字語彙処理から，学習者が漢字をどのように認知し，どのような点で誤りやすいのか(他の漢字との判別が難しいのか)を明らかにする。【課題２】漢字学習に成功した学習者の漢字学習ストラテジーの特徴の解明では，漢字学習ストラテジー調査から，漢字学習に成功した学習者とそうでない学習者との漢字学習ストラテジーを比較し，有効な漢字学習ストラテジーの解明を目指すことを試みた。【課題３】非漢字圏学習者の漢字語彙能力を構成する要因の検証では，単漢字処理能力，漢字語彙処理能力，漢字学習ストラテジー，学習期間が漢字語彙能力にどう影響するか検討することを試みた。

３．研究の方法

本研究では，各課題を明らかにするために，以下の方法で研究を行った。

【課題１】では，反応時間パラダイムを用いた 2 種類の実験を行った。実験では，非漢字圏日本語学習者と漢字圏日本語学習者に対して，漢字 1 文字の正誤判断課題と二字漢字語の正誤判断課題を行った。漢字 1 文字の正誤判断課題では，正しいと判断すべき漢字 80 文字と正しくないと判断すべき疑似漢字 80 文字を視覚提示した。二字漢字語の正誤判断課題では，正しいと判断すべき二字漢字語 40 語と正しくないと判断すべき漢字二字からなる非単語 40 語を視覚提示した。以上の刺激に対する反応時間と正答率をもって，非漢字圏および漢字圏日本語学習者の漢字の書字認知処理と二字漢字語の処理メカニズムを明らかにした。

【課題２】では，非漢字圏日本語学習者を対象に，SILK(Strategy Inventory for Learning Kanji)を用いて漢字学習ストラテジーを調査した。【課題１】で実施した漢字の書字正誤判断課題の結果から非漢字圏日本語学習者をグループ分けし，各グループの SILK の各設問の回答を比較した。

【課題３】では，【課題１】の実験で得られたデータを複数の要因でグループ分けし，比較検討した。そのほか，韓国語を母語とする日本語学習者を対象に，宮岡・玉岡・酒井(2011)を一部改変した日本語の語彙テストに加え，漢字(語彙)の読み書きを問うテストを紙ベースで実施した。この結果をもとに，日本語の語彙知識と漢字の読み書き能力との関係を検証した。

４．研究成果

【課題１】を明らかにするために，以下の調査を行った。

（１）　初中級日本語学習者向け日本語語彙知識測定テストの開発と評価

実験に先立って，日本語の語彙知識を測るテストを開発した。非漢字圏出身の初中級レベルの日本語学習者を主にターゲットとした 36 問からなるテストを作成した。また，このテストの有用性を確認するために，フィリピンで日本語を学習する 103 名に対しテストを試行した。その結果，本テストがある程度高い信頼性を備えていることを確認された。また，語彙テストで統制された語種・品詞・語彙レベル別の平均正答率を比較したところ，分散分析の結果，語種および品詞の正答率の主効果は見られなかった。さらに，分類木分析を用いて語彙テストの正誤に影響する要因を検討したところ，ターゲット語の正誤に最も強く影響したのは旧 JLPT 配当級である語彙レベルであり，語種・品詞の影響は語彙レベルに付随したものであった。以上の結果は，本語彙テストの項目がターゲット語の語彙レベルに合った難易度で作成できたこと，語種・品詞の特性が項目自体の難易度に直接的な影響を与えなかったことを示している。以上の結果は，大和・玉岡・茅本(2016)で報告した。

（２）　非漢字圏／漢字圏日本語学習者の漢字の書字認知メカニズムの検討

非漢字圏日本語学習者と漢字圏日本語学習者の漢字 1 文字の正誤判断について，判断の迅速さと正確さの面から検討した。宮岡・玉岡・酒井(2011)によって日本語の語彙知識が両グループ

同等であることが確認された，日本国内で学ぶ非漢字圏日本語学習者 33 名と漢字圏日本語学習者 13 名を分析の対象とした。実験では，漢字正誤判断課題を用いた。まず，提示された漢字の難易度(旧 JLPT の漢字級)，視覚的複雑性(画数)，学習者２群の３変数で正しい漢字の認知を予測する決定木分析を行った。その結果，正しい漢字の認知に影響したのは難易度であった。難しい漢字については，漢字圏学習者が非漢字圏学習者より正しく認知できた。非漢字圏学習者については，単純な漢字は複雑な漢字より正しく認知できた。一方，正しくないと判断すべき疑似漢字については，視覚的複雑性，誤りのタイプ(書字の過不足と構成要素の誤り)，学習者２群の３変数で擬似漢字の認知を予測した。その結果，疑似漢字の認知には複雑性の影響が強く，複雑な疑似漢字は，漢字圏学習者のほうが非漢字圏学習者より正しく認知できた。漢字の認知には学習者の特徴ばかりでなく，むしろ漢字の特性が強く影響することが示唆された。以上の結果は，CAJLE2016 で発表し，さらに分析を深め，大和・玉岡(2017)で結果を報告した。

次に，漢字正誤判断課題の反応時間の面から分析を試みた。反応時間は，線形混合効果モデリング(linear mixed-effects modelling，LME)によって分析した。その結果，正しいと判断すべき漢字の反応時間は，学習者グループ，提示された漢字の難易度，提示された漢字の複雑性のいずれの主効果も有意であったが，それぞれの交互作用はみられなかった。一方，正しくないと判断すべき疑似漢字の学習者グループの主効果は有意ではなかったが，提示された疑似漢字の誤りのタイプと提示された疑似漢字の複雑性の主効果は有意であった。また，いずれの交互作用もみられなかった。このことから，正しいと判断すべき漢字，正しくないと判断すべき疑似漢字の処理ともに，学習者グループの違いよりむしろ漢字そのものの特徴によって反応時間の差が見られたことがわかった。以上の結果は，JASLA2017 で発表した。

（３） 非漢字圏／漢字圏日本語学習者の二字漢字語の認知メカニズムの検討

非漢字圏日本語学習者と漢字圏日本語学習者の二字漢字語の正誤判断について，判断の迅速さと正確さの面から検討した。宮岡・玉岡・酒井(2011)によって日本語の語彙知識が両グループ同等であることが確認された，日本国内で学ぶ非漢字圏日本語学習者 33 名と漢字圏日本語学習者 13 名を分析の対象とした。実験では二字漢字語の正誤判断課題を行い，実験で得られた結果は決定木分析によって総括的・階層的に分析された。その結果，正しいと判断すべき二字漢字語の処理においては，語そのものの難易度が処理の正確さに最も影響を及ぼすこと，そして学習者の母語の書字形態の影響は二次的な影響要因となっていることが分かった。以上の結果から，被験者の母語の書字形態は，易しい語であれ難しい語であれ次に影響する要因として挙がっており，二字漢字語の書字認知では，漢字一文字の書字認知の結果と比較して，母語の書字形態の違いはある程度日本語学習が進んだ学習者においても影響する要因であることが確認された。一方，正しくないと判断すべき非単語の正誤判断においては，学習者の母語の書字形態の影響が強く見られ，やはり二字漢字語の書字認知にはある程度日本語学習が進み，語彙知識が同等である場合であっても，漢字系学習者は非漢字系学習者より有意に正しく非単語を誤りであると認識できることが分かった。また，本研究では，正しくないと判断すべき非単語の正誤判断課題を通して，学習者がどのような情報を手がかりに実在語か非単語かを判断するか明らかにするために，4 つの非単語の誤りのタイプを設定し，影響要因の 1 つとなることを予想していた。しかし，実際には非単語の誤りのタイプが影響要因として表れたのは，非漢字系学習者に対してのみであった。以上の結果は漢字二字からなる語の正誤を判断する際に着目する点が非漢字系学習者と漢字系学習者とでは異なることを示すものであると推察される。以上の結果は，JSLS2018 で発表し大和(2018)にまとめた他，この内容にさらに分析を加え大和(2019)で報告した。

さらに，非単語の正誤判断にかかる処理時間とその正答率から学習者の二字漢字語の認識の特徴を検討した。その結果，これまではあまり着目されてこなかった非単語の処理を見ることで，漢字圏学習者と非漢字圏学習者では二字漢字語を認識する方法が質的に違うこと，非漢字圏学習者は漢字語彙を文字単位で捉え正誤を判断していることがわかった。漢字圏学習者にとって，漢字二字からなる語の誤認を誘発する特定の非単語のタイプはなく，強いて処理の遅延・誤認を引き起こす非単語のタイプを挙げるとするならば，音韻的類似性と視覚的類似性がどちらも高い非単語であることがわかった。一方，非漢字圏学習者にとって，漢字二字からなる語の誤認を誘発する非単語のタイプは，音韻的類似性と視覚的類似性がどちらも高い非単語のほか，熟語を構成する漢字が同じであるが字順交替がある語であった。これらのことから，非漢字圏学習者は漢字二字からなる語(非単語)を認識する際に，呈示された二字の漢字の語(非単語)を形・読みの両方を(同程度に)ヒントにモニターし正誤判断しているが，語を構成する二字の漢字の字順にはあまり注意が払われていない可能性があることが示された。以上の結果は，第 12 回国際日本語教育・日本研究シンポジウムで口頭発表し，詳細な分析結果を大和(2019)として報告した。

【課題２】を明らかにするために，以下の調査を行った。

（１） 非漢字圏日本語学習者による漢字学習ストラテジーの検討

非漢字圏日本語学習者の選択する漢字学習ストラテジーに関する先行研究の多くは，成績上位者と下位者の漢字学習ストラテジーの選択を比較したものが多いが，上位者と下位者の区分の基準は様々であった。そこで本研究では，漢字知識の中でも漢字の字形認識の能力に着目し，漢字の書字認識の学習に成功した者とそうでない者とで使用する漢字学習ストラテジーに違いがあるかに限定して比較した。調査対象者は非漢字圏日本語学習者 41 名で，学習者の漢字の書字認知能力は漢字 1 文字の正誤判断課題の正答率で判定され，上位群 22 名と下位群 19 名に分

けられた。調査対象者には Bourke(1996)により開発された SILK(Strategy Inventory for Learning Kanji)全 56 項目に回答してもらい，「いつも使用する」を 5,「全く使用しない」を 1 として，5 段階で回答してもらい，分析には「いつも使用する」を 5 ポイント，「全く使用しない」を 1 ポイントとして各項目の使用ストラテジーを算出し比較した。その結果，上位群は，文脈や日常生活の中で比較的自然な形で漢字を使用し，既知漢字を利用するストラテジーを多用するのに対し，下位群は漢字を意識的に学習するストラテジーを多用していることが分かった。以上の結果は，ハノイ大学国際シンポジウムにて発表し，発表内容は大和(2018)にまとめた。

【課題３】を明らかにするために，以下の調査を行った。

（１） 非漢字圏日本語学習者の漢字認知処理に対する語彙知識の影響の検討

非漢字圏日本語学習者の漢字認知処理に語彙知識の影響が見られるかを検討するために，漢字正誤判断課題を通して検討した。実験に先立って，非漢字圏日本語学習者 47 名に大和・玉岡・茅本(2016)の語彙テストを受験してもらい，そのうち上位群 16 名・下位群 16 名の漢字正誤判断課題を正答率および反応時間を比較した。その結果，正しいと判断すべき漢字と正しくないと判断すべき疑似漢字が提示されたが，どちらも語彙知識が豊富な学習者はそうではない学習者より正確に，かつ迅速に正誤を判断することができることがわかった。正しいと判断すべき漢字の処理においても，正しくないと判断すべき疑似漢字の処理においても，分散分析では，正確さの面では語彙知識の主効果は有意傾向であり，迅速さの面では語彙知識の主効果は有意であるとの結果を得た。本研究のように反応時間パラダイムを用いた研究では，反応時間でみる迅速さが正答率でみる正確さよりセンシティブな指標であるとされる。したがって，上記の結果を総合的に考えると，日本語の語彙知識の豊富さは，漢字 1 文字の書字認知の効率性に影響を与えると解釈することができる。つまり，日本語の語彙知識が豊富な非漢字圏学習者はそうではない非漢字圏学習者より正確かつ迅速に日本語の漢字の書字(形)の正誤を判断できることがわかった。以上の結果は jst2018(タイ国日本研究国際シンポジウム 2018)において発表し，同シンポジウム論文集にも掲載された(大和 2019)。

（２） 非漢字圏日本語学習者の漢字認知処理に対する学習期間の影響の検討

これまでの研究によると，非漢字圏日本語学習者の場合，漢字という書字形態の弁別特性・識別特性を学習することが必要であるといわれており，それには時間がかかることが指摘されてきた(海保他 2001)。そうであれば，非漢字圏日本語学習者の漢字認知処理に学習期間の影響が見られると予想した。そこで，非漢字圏日本語学習者の漢字認知処理に対して，前述の日本語の語彙知識の影響とともに日本語学習期間の影響を総括的に検討することを試みた。実験に先立って，被験者の日本語学習歴と日本語の語彙知識でそれぞれグループ分けを行った。実験の結果は決定木分析を用いて分析した。その結果，正しい漢字の判断においても正しくない疑似漢字の判断においても，判断の正確さに最も強く影響するのは刺激要因(提示された漢字の特徴)であることがわかった。この結果は，大和・玉岡(2017)の結果と共通することから，やはり日本語学習者にとって漢字の種類は書字認知のしやすさに関わる重要な要因であることが確認された。本研究で書字認知の正確さに影響する一要因として想定した学習期間は，同じく要因の 1 つとして想定した語彙知識の影響より限定的な影響であることがわかった。正しいと判断すべき漢字の判断の正しさにも難易度の低い漢字の判断の場合にのみ，わずかに学習期間の影響がみられた。一方，正しくないと判断すべき疑似漢字の判断の正しさには学習期間は全く影響要因として表れなかった。それに対し，語彙知識は難しい漢字の正誤判断や疑似漢字の判断で刺激要因の次に影響する要因として表れていることがわかった。以上の点を総合して考えると，学習期間の影響は語彙知識より小さく，語彙知識と付随して，わずかに漢字の書字認知に影響しているのみであると考えられる。以上の結果は，2019 年度 第 16 回マレーシア日本語教育国際研究発表会で口頭発表した。

（３） 韓国語母語話者による日本語語彙知識と漢字読み取り／書き取り能力との関係の検証

韓国人日本語学習者 31 名を対象に，語彙テスト 36 問および漢字読み取り・書き取りテスト各 24 問(合計 48 問)の結果から，韓国人日本語学習者の語彙知識と漢字の読み書き能力との因果関係を検討した。日本語の語彙知識が漢字の読みと書きに同時に貢献する並列モデルと日本語の語彙知識がまず漢字読み取り能力に貢献し，読み取り能力を介して漢字書き取り能力に貢献するとする逐次モデルを想定して，それぞれのデータとモデルの適合度を構造方程式モデリング(SEM)の手法で調べた。その結果，逐次モデルがテストの結果を最もよく反映していることが分かった。このことから，韓国人日本語学習者は，日本語の基本的な語彙知識から漢字語の読み(音韻的表象群の形成)を習得し，その記憶の蓄積から，漢字語の書き取り能力(書字的表象群の形成)を向上させるという因果関係があることがわかった。以上の結果は，韓国日本言語文化学会 2017 年度春季大会で発表し，再分析をした上で大和・玉岡・熊・金(2017)で結果を詳しく報告した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 大和祐子	４．巻 -
２．論文標題 日本語学習者の二字漢字語の書字認知に影響する諸要因	５．発行年 2018年
３．雑誌名 言語科学会第20回国際年次大会(JSLS2018)ハンドブック	６．最初と最後の頁 86-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大和祐子	４．巻 -
２．論文標題 非漢字圏日本語学習者の漢字学習ストラテジー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 グローバル化時代における日本語教育と日本研究	６．最初と最後の頁 318-329
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大和祐子	４．巻 46
２．論文標題 日本語学習者の二字漢字語の書字認知の特徴－非漢字系学習者と漢字系学習者との比較から－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本語・日本文化	６．最初と最後の頁 21-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大和祐子	４．巻 -
２．論文標題 非漢字圏日本語学習者による漢字の書字的認知処理における語彙知識の影響	５．発行年 2019年
３．雑誌名 タイ国日本研究国際シンポジウム2018論文集	６．最初と最後の頁 218-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大和祐子・玉岡賀津雄・熊可欣・金志宣	4．巻 31
2．論文標題 韓国人日本語学習者の語彙知識と漢字の読み書き能力との因果関係の検討	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ことばの科学	6．最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大和祐子・玉岡賀津雄・茅本百合子	4．巻 30
2．論文標題 フィリピン人日本語学習者のデータを基にした非漢字圏学習者向け語彙テストの開発と評価	5．発行年 2016年
3．雑誌名 ことばの科学	6．最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/stul.30.39	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大和祐子	4．巻 15
2．論文標題 文字の認知メカニズムから考える漢字学習	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本研究論集	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大和祐子	4．巻 29
2．論文標題 日本語学習者による二字漢字語の書字的認知処理－非単語の処理に着目して－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語・日本文化研究	6．最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 大和祐子
2．発表標題 日本語学習者の二字漢字語の書字認知に影響する諸要因
3．学会等名 JSLS2018（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 大和祐子
2．発表標題 非漢字圏日本語学習者による漢字の書字的認知処理における語彙知識の影響
3．学会等名 タイ国日本研究国際シンポジウム2018（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 大和祐子
2．発表標題 非漢字圏日本語学習者の漢字学習ストラテジー
3．学会等名 ハノイ大学日本語学部2018年国際シンポジウム（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 大和祐子
2．発表標題 日本語学習者による二字漢字語の書字的認知処理の特徴
3．学会等名 香港第12回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 大和祐子・玉岡賀津雄
２．発表標題 非漢字圏日本語学習者の漢字認知のメカニズム
３．学会等名 CAJLE2017
４．発表年 2017年

１．発表者名 大和祐子・玉岡賀津雄
２．発表標題 漢字の書字的認知処理―非漢字圏と漢字圏の日本語学習者の比較―
３．学会等名 第28回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 大和祐子
２．発表標題 中上級非漢字圏学習者の漢字の書字的認知処理の特徴
３．学会等名 第1回タマサート大学・大阪大学日本語教育ジョイントセミナー
４．発表年 2018年

１．発表者名 大和祐子
２．発表標題 日本語学習者の二字漢字語の書字認知に影響する諸要因
３．学会等名 JSLS 2018年次国際大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大和祐子
２．発表標題 言語の認知メカニズムから考える漢字学習
３．学会等名 2016年度チュラーロンコーン大学・大阪大学学術交流会（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 大和祐子・玉岡賀津雄・熊可欣・金志宣
２．発表標題 韓国人日本語学習者の漢字読み書き能力の特徴
３．学会等名 韓国日本言語文化学会2017年度春季国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 大和祐子
２．発表標題 非漢字系日本語学習者の漢字書字認知に対する学習期間の影響
３．学会等名 2019年度 第16回マレーシア日本語教育国際研究発表会（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考